

ふるさと



紙魚のつぶやき

石塚千尋著

「ふらいんぐういっち」

第1〜3巻の紹介

弘前市出身の漫画家・

石塚千尋の「ふらいんぐういっち」(講談社・別冊少年マガジン連載)がマンガのみならず弘前でブームになっている。今春のテレビアニメ化(日本テレビ、青森放送)も手伝い、弘前は今「ふらいんぐういっち」一色に染まっている。

●あらすじ

魔法の多くは自然エネルギーに満ちる東北地方に住むそうである。魔法のタマゴは15歳になると一人前の魔法になるため独り立ちの修業に出る。そんなしきたりがあるとか…。



横浜に暮らす新米魔法の

真琴は高校入学を機に、黒猫のチトと一緒に弘前の親戚の農家に居候する。高校に通いながらの魔法修行。精霊や幽霊などの不思議な出来事に遭遇しながら少しずつ一人前に成長していく。居候先の家族や彼女を取り巻く人々との温かく穏やかな暮らし、そんな弘前での日常を描いた物語。

●スタジオジブリ?

表紙に描かれた若い魔法と黒猫そしてホウキからは、スタジオジブリ「魔法の宅急便」をイメージしてしまふ。壮大なストーリー展開を期待し読み進むと拍子抜けする。異世界に行ったり、魔法を使って何かを解決するわけでもない。狙いはそこにはない。魔法という設定を活かしながらも、日常の情景を淡々と描いている。

●「ご当地マンガ」

弘前での「のんびりとした日常の情景、特筆すべきはその背景である。弘前の実在する場所を忠実にトレースして描いている。居候先の農家、石場家住宅、藤田記念庭園洋館、弘前公園、桜まつりの屋台、お化け屋敷……。『ご当地ドラマ』ならぬ『ご当地マンガ』である。会話は標準語を使っているが、時折「めやく!めやく!」など津軽弁を効果的に織り込んでいる。

●レシピ本

高校下校の帰り道、道端に生える山菜・バツケ(ふきのとう)を採って帰る。そしてバツケの美味しい天ぷらの揚げ方を紹介。また、近くの山で採取したゴミの美味しい食べ方、ほか大根の育て方、ホットケーキの上手な焼き方、など「食」のうんちくがちりばめられている。(作者が弘前で暮らしていた頃の経験?) 田舎のおばあちゃんに教わるレシピ本である。

●魔法設定はギミック

背景の描写に注ぐエネルギー、作者はふるさとである弘前そのものを描きたかったのではないだろうか。生まれ育った弘前への懐かしさとオマージュ。時折起こる不思議な出来事や魔法修業の非日常は、まったくとした弘前の日常生活を強調・表現する仕掛け(ギミック)ではないか。

●聖地巡礼

にしても「ふらいんぐういっち」の楽しみ方はいろいろあるようだ。《登場人物への感情移入》「真琴のキャラクターに惹かれる」「千夏(いとこ)の仕草がかわいい」などオタク的ファンがネットつぶやいている。

《描かれている風景・背景を探し出す聖地巡礼の旅》舞台めぐりのマップも発行されており、遠くからも各地のファンが弘前を訪れている。マンガに登場する背景を探し出し、カメラにおさめる。ペンチの位置や

バス停看板のアンクルなどのディテールにまでこだわって探し出す。

弘前では「ふらいんぐういっち」効果が拡がっている。ラッピングバス、ラッピング列車の運行。記念乗車券の限定販売。さくらの紅茶、りんごの紅茶、りんごはちみつ飴などオリジナル商品の販売。そして、今年の弘前ねぶたまつりにもキャラクターねぶたとして登場するそうだ。オタクが集まる街はそれなりに活性化するとか…。

このコミック本が弘前の魅力発信の一助になっているのは確かである。

発行—1巻2013年12月・2巻2014年6月・3巻2015年4月(以下続刊)

発行所—(株)講談社

TEL03・5395・3608

定価—各巻429円+税

(千葉貴司 記)